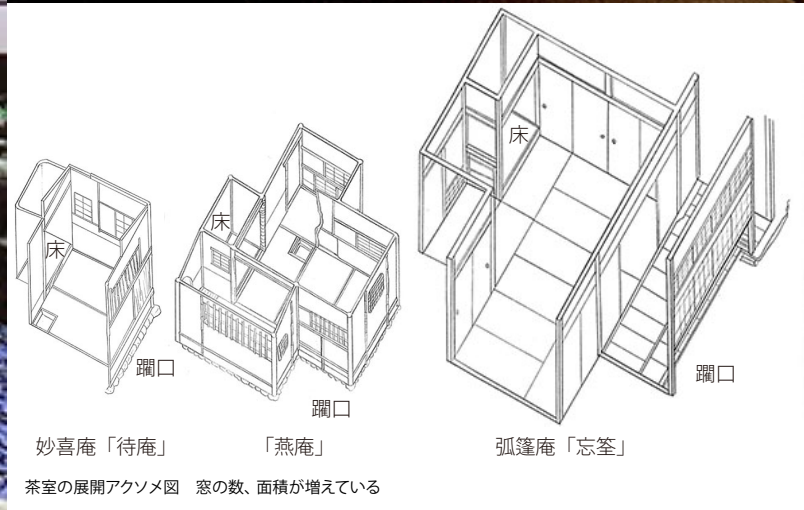




小堀遠州 弧篷庵「忘筌」 縁先に見る露地の色と光



千利休 妙喜庵「待庵」内部 下地窓が生み出す陰翳の階調



茶室の展開アクトメ図 窓の数、面積が増えている

## 茶室における光と色の研究 ～窓や露地の拵え及び素材と茶匠や研究者の美意識を基に～

Study on light and color in tea room - Based on design and materials of windows and gardens, and on aesthetic sense of tea masters and academics

人文科学系 / 建築意匠論 / 論文

建築デザインコース

谷 菜里

Tani Shiori

茶室は日本独自の空間である。茶の湯は総合芸術であり人の心に潤いを与える。小堀遠州の弧篷庵「忘筌」を知り、下部を吹き抜いた明障子と露地が内に入る風景に感動した。光や色彩をもつ露地も内部空間に何らかの影響を与えるとみて、外部である露地与茶室、それらを介する茶室の窓は切り離すことのできない関係があると考えた。日本人が忘れかけている建築の光と闇(陰影)の遊動や色の階調をめぐる美意識を取り戻す。茶室における光と色の関係を明らかにし、日本建築の持つ魅力を、茶室を例にして述べる。

### 茶の湯空間の光と色

研究方法として近・現代の茶室研究家である、堀口捨己と中村昌生の研究と制作を参照した。茶匠の言説より光と色に対する好みをまとめた。千利休は暗い空間で黒色、古田織部は利休よりも明るい空間で派手な色、小堀遠州はさらに明るい空間で綺麗な白色といった風に、空間に求める光と色の在り方に違いが見られる。筆者は、好みは美意識の現れであると考え。茶匠それぞれの美意識が茶の湯の多様性と発展を示すのではないかと。窓と露地が明暗を操り、生み出された闇においては暗い色が醸成され、明るく照らされたところには、色が明るく映え、両者が引き立たされることで茶の湯空間の神秘性を深めていると思われる。このように、茶の湯空間を通して光と色の特異な関係を見ることができる。茶の湯空間の光と色は一見、ただ暗い、単彩色という風に単一に見えるかも知れない。しかし、その中に緩やかで幽かな階調が見られるのである。これが茶の湯の美しさを深める一因であると筆者は考える。

### 結論

日本固有の自然観や美意識、禅の思想などを茶室の中で客と共に体験し、それを至高の美として表現しようとした茶匠たちはその現象性を光と色で拵えようとした。その中でも彼らは神秘的な空間を形成するために重要なものは窓と拵え、工夫を凝らした。その窓が生み出す光と色のあいまいさ、陰翳の色の階調のなかに日本の美を見出すことができる。我々現代人の暮らしは明るく照らされ、空間が持つ美しさは見え辛くなっている。茶匠が求めた光と色の在り様を茶室が示してくれる。